

エコビレッジで暮らす人々の関係性と精神性

黒宮心愛

HS29-0147K

目次

- 第 1 章 はじめに
 - (1) 研究動機
 - (2) 研究目的
 - (3) 先行研究の整理と研究領域の選定
 - (4) 論文の構成および研究方法
- 第 2 章 エコビレッジとは何か
 - (1) 定義、特徴、関連用語
 - (2) エコビレッジ運動の歴史
 - (3) 日本におけるエコビレッジ運動の推進
- 第 3 章 事例紹介～フィールドワークを通して～
 - (1) 調査地の選定
 - (2) 事例 1 「三角エコビレッジサイハテ」
 - (3) 事例 2 「アズワン鈴鹿コミュニティ」
 - (4) 考察
- 第 4 章 おわりに
- 参考文献、注

1 はじめに

近年、核家族化やライフスタイルの多様化などにより、人と人とのつながりが希薄になりつつある。また、SNS の普及により、どこでも誰とでも気軽につながることができるようになった。しかし、人は相互に助け合い、関わり合いながら生きている以上、つながりが希薄な社会や、浅く広くつながる社会は豊かとはいえないのではないだろうか。そうした疑問を抱いていた時に、人と人とのつながりを大切にしたコミュニティを形成するエコビレッジに出会い、非常に興味を抱いた。本論文の目的は、エコビレッジの実態を明らかにすることで、上記のような現代社会において、エコビレッジの持つ可能性について考察するとともに、エコビレッジで暮らす人々の精神性を明らかにすることで、私

自身を含め、現代社会に漠然とした不安を抱える人々が、人生の選択肢を広げることにささやかでも寄与することである。2つのエコビレッジで実際にフィールドワークを行い、参与観察や聞き取り調査のなかから得られた情報を用いて研究を行うこととする。

2 エコビレッジとは何か

本論文では、エコビレッジを次のように定義する。「社会環境、自然環境を蘇らせるために、地域主体で参加型のプロセスを通して意識的にデザインされたある意図を持って形成されたコミュニティまたは伝統的なコミュニティである。それらは持続可能性の 4 つの側面(環境、経済、社会、世界観)が全てホリスティックな(全体的)アプローチに向けて統合されているものである」。

小野・空閑・佐藤・林・古橋(2013)において、古橋は、定義内の 4 つの側面の要素についてそれぞれ述べており、筆者により次のように整理した。環境面の要素は、①居住地域に適応した室内環境を整えることの出来る住居、②地力を保ち、生態系を豊かにする安全で安心な食糧の生産、③持続可能なエネルギーの生成と有効利用、④循環可能な資源の有効利用や自然の仕組みを模倣した汚水処理、⑤人と人、人と自然の適切な交流を生む動線の考慮である。経済面の要素は、①ローカリゼーション、②グリーン購入の実践、③社会的企業の創立・運営により生計を得る、④コミュニティ銀行や地域通貨の導入、⑤政府提供の既存の制度を有効活用するための情報把握と活用である。社会面の要素は、①明確な目的と方針を定める、②異なる価値観を持つ人々が集う、③不公平感を生まない

意思決定の方法や、全体を巻き込む話し合いの手法、④一人ひとりの価値を引き出し、各々が適切なリーダーシップを取れるような意識づくり、⑤誰とでも調和的な関係を築いていくことである。世界観の要素は、①目の前の出来事に囚われず、枠の外から全体を統合的に観る視点を身に付けたり、異なる視点を受け入れる柔軟な心を持つ、②人類は他の存在と共に在り、それらによって生かされているということに気づき、全てと調和して生きる、③他者を鏡として自らのあり方に気づき正していく、④上記のような学びを、実践を通して社会に反映させていくことである。

これらの要素を持つ4つの側面が統合的に絡み合うことで、エコビレッジは構成されている。

3 事例紹介～フィールドワークを通して～

事例紹介では、定義内の4つの側面の要素と照らし合わせながら、各エコビレッジについて述べている。両エコビレッジとも、多かれ少なかれ、4つの側面の要素をそれぞれ持っており、なかでも「世界観」については、「エコビレッジで暮らす人々は、“世界観”ではなく、“社会観”を共通して持つ」、「エコビレッジで暮らす人々は、その“社会観”に魅力を感じたり、共感したことにより、コミュニティに参入している」、「その“社会観”は、個々人の価値観（＝精神性）と他者との関わり（＝関係性）の2つの要素により実現していること」の三点が共通していることが明らかとなった。精神性と関係性、このどちらも、バランスを取りあいながら大切にしていくことにより、「個々人が持つ価値観を大切にしながらも、関係性の豊かな調和のとれたコミュニティ」を形成することができる。これは、先行研究で述べている、高倉（1993）によるコミュニティの理想像や、今田（2017）が現代社会においてその必要性を説いた「個々人が抱く関心によって互いに他者と関わり合い、相互に応答的になる関係」そのものであり、これこそが、人と人とのつながりが希薄になった

現代社会において、エコビレッジの持つ可能性であり、「新しいコミュニティの在り方」の一つとして提示できるのではないだろうか。

また、今回調査を行うなかで、エコビレッジそのものが持つ課題として「エコビレッジ間の交流が活発に行われていないこと」が明らかとなった。各エコビレッジによって強みや得意とすることは異なり、それぞれの良さを共有しあう機会を設けることにより、さらなるエコビレッジの発展に寄与できるのではないだろうか。

4 おわりに

本論文では、エコビレッジを「新しいコミュニティの在り方」の一つと捉え、人と人との関わりが極めて希薄になった現代社会において、エコビレッジがどのような可能性を持っているか、これまであまり着目されてこなかった「エコビレッジで暮らす人々の関係性や精神性」に焦点を当て、探ろうとしてきた。取り上げた事例は2つであるが、そこで暮らす人々や関係者の語りからは、あまり知られていない実態を少しは明らかにすることができたのではないかと考える。今後も、エコビレッジについて幅広い視点から解明していくと同時に、世の中にエコビレッジという存在をさらに広めていく必要があるだろう。

参考・引用文献（一部抜粋）

- ・今田高俊，2017，「個人化のもとで共同体はいかにして可能か」『学術の動向』22巻9号（36-41）公益財団法人日本学術協力財団。
- ・小野直哉・空閑厚樹・佐藤太・林悦子・古橋道代，2013，「持続可能な暮らしと生活の質の向上の両立はいかにして可能か」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』15（91-108）。
- ・高倉節子，1993，『住民の意識構造とコミュニティ形成』ぎょうせい。